

## ハクチョウについて

星子廉彰

061-0222 当別町元町104

2005年長野県において開催された日本白鳥の会の総会・研修会に参加、事務局からのを見て、1990年4月宮島沼でピヨピヨと良く鳴きながら泳いでいたのを思い出し、特別に長野県アルプス白鳥の会作製、ハクチョウの記念写真集を見せて頂いた折り、コハクチョウの嘴の奇形、首が著しく曲がり、顔全体が大きい写真が掲載されていた

表1. 南空知、石狩におけるハクチョウ渡来状況 (1975~2005)

年	オオ		アメリカ		コブ		ナキ	
	コハクチョウ	ハクチョウ	コハクチョウ	ハクチョウ	コハクチョウ	ハクチョウ	コハクチョウ	ハクチョウ
1975		10						
1976		10						
1977		10						
1978		10						
1979	65	14						
1980	130	70						
1981	267	53				1		
1982	290	25						
1983	354	19						
1984	320	187						
1985	400	250						
1986	984	250		6				
1987	808	203		3				
1988	1,019	110		1				
1989	3,000	200		3		1		
1990	5,650	200		3				
1991	4,600	1,000		2				
1992	10,000	400		6				
1993	7,000	600		20		1		1
1994	19,000	161						
1995	12,000	2,000		1				
1996	8,000	500						
1997	10,000	150		1				
1998	7,000	2,000		1				
1999	19,300	300		1				
2000	12,000	300		8				
2001	14,000	500						
2002	20,000	100						
2003	5,000	200		2				
2004	16,000	3,600						
2005	17,000	2,000		2				

表2. 宮島沼における春のマガン飛来数

	2001	2002	2003	2004	2005
3月25日	3,500	2,000			300
4月1日	1,000		12,000	23,000	10,000
4月5日	17,000	40,260		10,000	4,400
4月10日	19,950		25,000	20,000	1,000
4月15日	25,023		30,000	31,000	11,000
4月20日	64,230	59,980	40,000	30,000	52,260
4月25日			65,300	69,000	
5月1日			40,000	30,000	65,000
北帰行	5月3日	5月3日	5月6日	5月2日	5月2日

長野県から飛翔ルートを知る事ができました。

オオハクチョウで足全体に黒とピンクのモザイク模様をついた個体を一時期複数で宮島沼やウトナイ湖で観察しております。

オオハクチョウが、2003年、2004年、2005年とウトナイ湖で自然繁殖しております。

石狩、空知地区で春飛来のコハクチョウは、北帰行直前、宮島沼や月カ湖に集結して、例年4月15日前後に一気に北上するのが、2005年の春には融雪が著しく遅れ、4月25日早朝6～8時頃、月カ湖のコハクチョウが10～20羽と鳴きながら石狩川沿いに北上途上10km近く北にある宮島沼のコハクチョウを誘いながら一気に北上しました。午後に点々と沼を尋ねましたが、元気なコハクチョウは見られませんでした。マガンの北帰行の瞬間は、殆ど大群が一気に飛び立ちます。ビデオカメラでそれぞれ記録しています。

マコモについては、ガン、ハクチョウに対する重要な餌となっており、本州の熱心な研究者は栽培を試みています。以前、宮島沼でオオハクチョウがマコモの茎を15cm

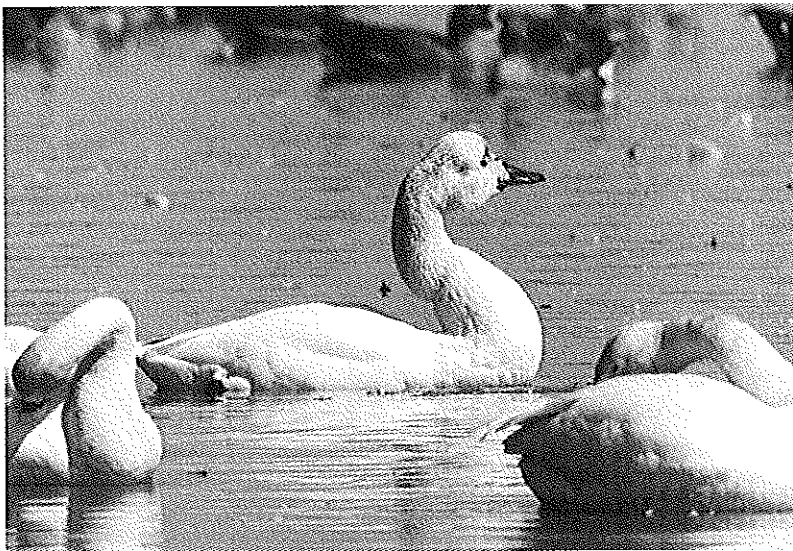


図1. 首の曲がった奇形コハクチョウ。

に折り、10本近く飲み込み、食道破裂で死亡しているのを確認したことがあります。かつて宮島沼でマコモ、キタヨシの生い茂る水面がギラギラと重油が流れ込んだ様に淀んでいたことがありました。原因はマコモの油の滲出と論ずる沼の関係者がいたので、納得出来ず、道外での研究者に問い合わせ、分析資料も頂き、マコモが原因ではなりことがわかりました。

1970年頃の宮島沼では、春の渡りでオオハカウチョウが10羽前後とカモがおり、寂しい感じを受ける沼でしたが、秋は狩猟期でしたが、マガン、オオヒシクイそれぞれたまに数羽の小群が見られました。

宮島沼は底が殆ど平坦で水深が浅いので、どんどん浅くなる原因も抱えているので、富栄養化の問題とともに、真剣に対策を試みる必要性が逼迫化してきていると考えます。



図2. 月形町月ヶ湖。